

「幸せな不況脱出気配

デフレは中高年、特に引退した世代の方には結構心地よいものだ。物価が少しずつではあっても下がっていくので、これまでに蓄えた貯金の価値が目減りすることはない。年金も、本来は物価下落に応じて支給額が減っていく制度のはずだが、政治的な理由もあって減額されることはない。

日本のデフレを、幸せな不況と呼ぶ人がいる。景気は低迷しているが、当面、大半の人は生活に困ることはない。銀行の預貯金にお金を預けておけば、その価値も安泰である。資産運用など難しい

伊藤 元重

構造機大東大教授
研究開発
合研
理事
総理

ことを考えるよりは、ただ銀行や郵貯銀行に預けておけばよいのだ。

ただ、これはあくまでも高齢者の視点である。デフレが若者にかに厳しいことなのかは、多くの若者が望むような仕事につけないということから分かるだろう。

日本の高齢者も資産運用を

中小企業の経営者にとっても、デフレの下での景気低迷は厳しい。

デフレはまた、不安を醸成するものである。デフレで、国民も企業も防衛的になっていっているので、消費や投資が伸びない。膨大な貯蓄資金が金融機関に入るがその大半は国債の購入に回る。つまり、国民の貯蓄は政府の借金の穴埋めに

使われている。

将来のために積極的に投資をしない国は衰退する。教育、科学技術、子育て、設備投資、社会資本投資、海外投資など、投資の対象はいろいろある。どこに投資するのかが別として、とにかく将来に向かつて投資を続けない社会は衰

退する。この20年、日本はそういう国だった。だから国民の多くが将来に不安を抱えてきた。

安倍内閣の下で、強烈な脱デフレ政策が動いている。為替レートも株価も大きく動いている。デフレから脱出できそうな気配になってきた。これは素晴らしいことだが、中高年の方々は、デフレの時

代のマインドを見直す必要がある。

何も考えずに銀行の普通預金や貯金にお金を預けていて、もしインフレになっていたら資産価値が目減りしていく。普通預金ではなく長期の貯蓄性の預貯金であれば、金利も物価上昇を反映して多少は高くなるだろう。それでも物価上昇を補うだけの金利上昇が確保されているわけではない。

預貯金一辺倒から分散

インフレになって中高年が損をするわけではない。ただ、何も考えないで惰性で預貯金を持つていると、物価上昇の悪影響を受ける可能性がある。これは言うは簡単だが、なかなか大変なことかもしれない。

インフレでも蓄えを目減りさせないためには、それなりの資産運用の工夫が必要だからだ。預貯金一辺倒ではなく、投資信託、株式、REIT（不動産投資信託）、国債など、いろいろな形での資産の分散を図る必要があるからだ。国債についても、物価連動で金利が変わる国債が大量に発行されるようになれば、そうした国債をインフレ対策として持つことも考えられる。

私の友人の87歳の米国人の夫婦は、専門家の助言を受けながら、こうした資産運用をしている。大きな資産があるわけではない。ごく普通の庶民だ。それでも資産運用をきちんと考えながら、老後を楽しんでいる。日本の高齢者の方々にこそあってほしいと思う。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。